

# 耕耘部の時計

宮沢賢治

青空文庫



# 一 午前八時五分

農場の耕耘部の農夫室は、雪からの反射で白びかりがいつぱいでした。

まん中の大きな釜からは湯気が盛んにたち、農夫たちはもう食事よくじもすんで、脚絆きやはんを巻いたり藁沓わらぐつをはいたり、はたらきに出る支度したくをしていました。

俄かに戸にわがあいて、赤い毛布もうふでこさえたシャツを着た若い血けつし色のいい男よくがはいつて来ました。

みんなは一ぺんにそつちを見ました。

その男は、黄いろなゴムの長靴ながぐつをはいて、脚あしをきちんとそろえて、まっすぐに立って云いいました。

「農夫長の宮野目みやのめさんはどなたですか。」

「おれだ。」

かがんで炉ろに靴くつ下したを乾かわかしていたせいひくの低い犬けがわの毛皮けがわを着た農夫が、腰こしをのばして立ちあがりました。

「何か用かい。」

「私は、今事務所じむしょから、こちらで働はたらけと云いわれてやっまりました。」

農夫長のうふちようはうなずきました。

「そうか。丁度ちやうどいいところだった。昨夜ゆうべはどこへ泊とまった。」

「事務所へ泊りました。」

「そうか。丁度よかった。この人について行ってくれ。玉蜀黍の脱穀だつこくをしてるんだ。機械きかいは八時半から動くからな。今からすぐ行くんだ。」農夫長は隣りとなで脚絆きゃはんを巻まいている顔のまつ赤かな農夫を指さしました。

「承知しょうちしました。」

みんなはそれつきり黙だまって仕度したくしました。赤シャツはみんなの仕度する間、入口にまっすぐに立たつて、室の中を見まわしていましたが、ふと室の正面にかけてある円まるい柱時計はしらどけいを見あげました。その盤ダイアル面は青じろくて、ツルツル光あつて、いかにも舶来はくらいの上じょう等とうらしく、どこでも見たことのないようなものでした。

赤シャツは右腕みぎうでをあげて自分の腕時計を見て何気なく低くひくつぶやきました。

「あいつは十五分進すすんでいるな。」それから腕時計の竜頭りゆうづを引つぱつて針はりを直なおそうとしました。そしたらさつきから仕度ができてめずらしそうにこの新しい農夫の近くに立つてそのようすを見ていた子供こどもの百ひやく姓しょうが俄にわかにくすりわらと笑いました。

するとどう云いうわけかみんなもどつと笑つたのです。一いっせい斉せいにその青じろい美しい時計の盤ダイアル面めんを見あげながら。

赤シャツはすっかりどぎまぎしてしまいました。そしてきまりの悪いわるのを軽くかる足ぶみなどをしてごまかしながらみんなの仕度のできるのを待まっていました。

## 二 午前十二時

る、る、る、る、る、る、る、る、る、る。

脱穀器だつこくきは小屋こややそこら中の雪、それからすきとおったつめた  
い空気をふるわせてまわりつづけました。

小屋こやの天てんじょう井いにのぼった人たちは、器械きかいの上の方からどんど  
ん乾かわいた玉蜀黍とうもろこしをほうり込みました。

それはたちまち器械の中で、きれいな黄色の穀粒こくりゆうと白い細ほ  
長そながい芯しんとにわかれて、器械きかいの両側りょうがわに落おちて来るのでした。

今朝けさ来たばかりの赤シャツの農夫のうふは、シャベルで落ちて来る穀粒

をしやくつて向うに投げ出していました。それはもう黄いろの小山を作っていたのです。二人の農夫は次から次とせわしく落ちて来る芯を集めて、小屋のうしろの汽缶室に運びました。

ほこりはいっぱいになり立ち、午ちかくの日光は四つの窓から四本の青い棒になつて小屋の中に落ちました。赤シャツの農夫はすっかり塵にまみれ、しきりに汗をふきました。

俄かにピタツとどうもろこしの粒の落ちて来るのがとまりました。それからもう四粒ばかりぼろぼろとところがつて来たと思うとあとは器械ばかりまるで今までとちがった楽なような音をたてながらまわりつづけました。

「無くなつたな。」赤シャツの農夫はつぶやいて、も一度シャツ



の袖そででひたいをぬぐい、胸むねをはだけて脱穀小屋の戸口に立ちました。

「これで午ひるだ。」天井でも叫さけんでいます。  
る、る、る、る、る、る、る、る、る、る。

器械はやっぱり凍こおったはたけや牧草地ぼくそうちの雪をふるわせてまわつています。

脱穀小屋ひさしの庇ひさしの下に、貯蔵庫ちよぞうこから玉蜀黍とうもろこしのそりを牽ひいて来た二足ひきの馬うまが、首くびを垂たれてだまって立たって居いました。

赤シャツあかシャツの農夫のうふは馬うまに近ちかよつて頸くびを平手ひらてで叩たたこうとしました。

その時むこ、向むかうの農夫室のうふむらのうしろの雪の高みの上に立たてられた高たかい柱はしらの上うへの小さな鐘かねが、前ぜん后ごにゆれ出し音ねはカランカランカラン

カランとうつくしく雪を渡つて来ました。今までじつと立っていた馬は、この時一緒に頸をあげ、いかにもきれいに歩調を踏んで、厩の方へ歩き出し、空のそりはひとりで馬について雪を滑つて行きました。赤シャツの農夫はすこしわらつてそれを見送つていましたが、ふと思ひ出したように右手をあげて自分の腕時計を見ました。そして不思議そうに、

「今度は合っているな。」とつぶやきました。

三 午後零時五十分

午の食事が済んでから、みんなは農夫室の火を囲んでしばらく

くやすんでいました。炭火すみびはチラチラ青い焰ほのおを出し、窓ガラスからはうるんだ白い雲が、額ひたいもかつと痛いいたようなまつ青さおなそらをあてなく流ながれていくのが見えました。

「お前、郷里くにはどこだ。」農夫長のうふちようは石炭せきたん函ぼこにこしかけて両手りようてを火にあぶりながら今朝けさ来た赤シャツにたずねました。

「福島ふくしまです。」

「前はどこに居いたね。」

「六原ろくはらに居おりました。」

「どうして向むこうをやめたんだい。」

「一ペン郷国くにへ帰かえりましたね、あすこも陰気いんきでいやだから今度はこつちへ来たんです。」

「そうかい。六原に居たんじや馬は使えるだらうな。」

「使えます。」

「いつまでこつちに居るつもりだい。」

「ずっと居ますよ。」

「そうか。」農夫長はだまつてしまいました。

一人の農夫が兵隊へいたいの古外套ふるがいとうをぬぎながら入つて来ました。

「場長は帰っているかい。」

「まだ帰らないよ。」

「そうか。」時計ががちつと鳴りました。あの蒼白あおしろいつるつるの瀬戸せとでできているらしい立派りっぱな盤面ダイヤルの時計です。

「さあじき一時だ、みんな仕事しごとに行つてくれ。」農夫長が云いいま

した。

赤シャツの農夫はまたこつそりと自分の腕時計うでを見ました。

たしかに腕時計は一時五分前なのにその大きな時計は一時二十分前でした。農夫長はじき一時だと云い、時計もたしかにがちつと鳴り、それに針は二十分前、今朝は進すすんでさつきは合い、今度は十五分おくられている、赤シャツはぼんやりダイアルを見ていました。

俄にわかに誰だれかがクスクス笑わらいました。みんなは続つづいてどつと笑わらいました。すつかり今朝の通りです。赤シャツの農夫はきまり悪わるそうに、急いそいで戸をあけて脱穀だっこく小屋こやの方へ行きました。あとではまだみんなの気のよさそうな笑い声にまじって、

「あいつは仲々なかなか気取きどってるな。」

「時計ばかり苦くにしてるよ。」というような声が聞えました。

## 四

日暮ひぐれからすつかり雪になりました。

外ではちらちらちらちら雪が降ふっています。

農夫室のうふしつには電燈でんとうが明るく点つき、火はまつ赤かに熾おこりました。

赤シャツの農夫は炉ろのそばの土間に燕えんぼく麦むぎの稈わらを一ひと束たばし敷しいて、

その上に足を投なげ出して座すわり、小さな手帳てちように何か書き込こんでいました。

みんなは本部へ行つたり、停車場まで酒を呑みに行つたりして、室にはただ四人だけでした。(二月十日、玉蜀黍脱穀)と赤シャツは手帳に書きました。

「今夜積るぞ。」

「一尺は積るな。」

「帝釈の湯で、熊また捕れたつてな。」

「そうか。今年は二疋目だな。」

その時です。あの蒼白い美しい柱時計がガンガンガン六時を打ちました。

藁の上の若い農夫はぎよつとしました。そして急いで自分の腕時計を調べて、それからまるで食い込むように向うの怪しい時

計を見つめました。腕時計も六時、柱時計の音も六時なのにその針は五時四十五分です。今度はおくれたのです。さつき仕事を終つて帰つたときは十分進んでいました。さあ、今だ。赤シャツの農夫はだまつて針をにらみつけました。二人の炉ばたの百姓たちは、それを見てまた面白そうに笑つたのです。

さあ、その時です。いままで五時五十分を指していた長い針が俄かに電のように飛んで、一ぺんに六時十五分の所まで来てぴたつととまりました。

「何だ、この時計、針のねじが緩んでるんだ。」

赤シャツの農夫は大声で叫んで立ちあがりました。みんなもも一度わらいました。



赤シャツの農夫は、窓<sup>まど</sup>ぶちにのぼつて、時計の蓋<sup>ふた</sup>をひらき、針をがたがた動<sup>うご</sup>かしてみたら、盤<sup>ばん</sup>に書いてある小さな字を読みました。

「この時計、上<sup>じょう</sup>等<sup>とう</sup>だな。巴里<sup>パリ</sup>製<sup>せい</sup>だ。針<sup>はり</sup>がゆるんだんだ。」

農夫<sup>のうふ</sup>は針の上のねじをまわしました。

「修<sup>しゅう</sup>繕<sup>ぜん</sup>したのか。汝<sup>うな</sup>、時計屋<sup>や</sup>に居<sup>い</sup>たな。」

「炉<sup>ろ</sup>のそばの年老<sup>と</sup>つた農夫<sup>のうふ</sup>が云<sup>い</sup>いました。若い農夫<sup>わか</sup>は、も一度自分の腕時計に柱時計の針を合せて、安<sup>あん</sup>心<sup>しん</sup>したように蓋<sup>ふた</sup>をしめ、ぴよんと土間にはね降<sup>お</sup>りました。

外では雪がこんこん降り、酒<sup>さけ</sup>を呑<sup>の</sup>みに出掛<sup>で</sup>けた人たちも、停<sup>てい</sup>車<sup>しや</sup>場<sup>ば</sup>まで行くのはやめたらうと思われたのです。



# 青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 耕耘部の時計

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>